

Course N@viの機能を効果的に活用し、学生相互の意見交換を促進。建設的な議論が可能に

早稲田大学社会科学部で教鞭をとる新美講師は、アクティブ・ラーニングとe-Teachingを導入した授業を行った。学生たちの様子を見ながら、Course N@viの機能を効果的に利用するとともに、意見を交換しやすい雰囲気を作り出すための細かな工夫も盛り込んだ。学生から高い評価が寄せられた授業の様子や、Course N@viを活用した取組について話を聞いた。



新美 貴英
社会科学総合学院 講師



アクティブ・ラーニングとe-Teachingの実現を柱に授業を設計

社会科学部の1年生以上が受講する基盤専門科目、「グローバルラーニング（ジャーナリズムから見る現代社会）A」は、日英併用で行われる、英語を使って専門分野を学ぶことを基本コンセプトとする科目である。2019年度春学期には30名程度の学生が受講した。新美講師はこの科目を担当するにあたり、アクティブ・ラーニングとe-Teachingを実現することを目指して掲げた。学生の主体的な授業参加と相互の意見交換を促し、課題発見能力と課題解決能力を身につけてもらうためである。

そのためのツールとして活用したのが、Course N@viの中でも特に「レポート機能」「ディスカッション機能」「お知らせ機能」の3つであるという。

Course N@viの「レポート機能」、時間差で「ディスカッション機能」を活用

全体の講義の流れとしては、15週のうち初回にガイダンス、第2週に「イントロダクション（ネットワーク）」を実施。履修している学生のうち1年生が多数を占めている状況を考慮し、学生同士がお互いに顔見知りになれる機会を設けた。第3週から本格的に授業に入っていく。最初の数分で前回の復習、フィードバックを行い、次に約40分間、課題に取り組む時間を設ける。英文の新聞記事、雑誌記事などから選んだ題材を検討資料として配布し、英文の読解を行わせる。次に、キーセンテンスの把握と、自分の意見をまとめる作業を行わせる。

その後、ペアワークに移る。時間にして30分ほどで、学生たちはランダムにペアを作り、意見を発表し合う。話し合う時間は8分と設定。タイマーを表示させておき時間が来たらペアを交代させる。授業後1週間以内に学生はCourse N@viの「レポート機能」を使って、レポートを新美講師宛てに送信する。新美講師はレポートを読み、次回の授業でフィードバックがあれば触れる、というのが基本の流れである。

さらに、第11週からCourse N@viの「ディスカッション機能」を活用した。各学生は新美講師に送るレポートと同じ内容のものをディスカッションにも投稿し、学生同士で互いにコメントを書き込む。コメントを書き込む相手は指定せず、「よいところを必ず1点見つけて褒めること、なるべくコメントがついていないものにコメントをするように」と促したとのこと。また、第11週から実施した理由は、相互にコメントしやすい雰囲気が作られ、建設的な意見を書き込める段階に至るのを狙ったためである。ほぼ予定通りのスケジュールで進行できたため、予定していた時期に相互評価を行う段階に移ることができたそうだ。

話しやすい雰囲気を作るための細やかな工夫が功を奏し、深い議論が可能に

細かい工夫もいくつか施した。まず1点目は、学生間の活発な議論を可能にするためネットワークのための時間を設けたことである。これは第2週の「イントロダクション」の時間に行った。自己紹介シートを配布し、名前、趣味、サークルは何をやっている、というようなことを自由に書いてもらった後、ペアで8分ずつ発表し合う機会を設け、かなり時間をかけて丁寧に行ったそうだ。

2点目は、全員の前で発表という形にするのではなく、ペアワークという形にしたことである。いきなり大人数の前で発表させると、学生が緊張・委縮したり、思ったような意見が出せなかったりする懸念がある。また、グループディスカッションにすると話上手の学生と引っ込み思案の学生に分かれてしまうリスクがある。いい発想を持っていても発表できない状況避けるために、あえて二人一組にこだわった。「ペアワークにしたことでお互いの意見を落ち着いて言い合えるし、テーマについて批判や賛同なども論じ、議論を深掘りできている時間になっていると感じました」。

また3点目は、ペアワークに入る時点からBGMを流したことである。個人で集中して行う作業の時間と、交流する時間とのメリハリをつけ、リラックスした雰囲気を作るように心がけた。

アクティブ・ラーニングを取り入れようと思ったときに念頭にあったのは、教員の講義を学生が「受け身で・一方的に」聞くのではなく、学生自らが「主体的・能動的・そして双方向的に」学べるように、ということだったそうだ。アクティブ・ラーニングを通して「考える力」と「伝える力」そして「相手の意見を聞く力」、この3つの力を養うことを目指した。そのうち、特に聞く力を学んでほしかった、と新美講師は語る。「特に最近、大人も含めてですが、SNSとかで自分の都合のいい意見ばかり入ってきて、ある意味で偏った意見になりがちですので、いかに自分と違った意見を尊重して聞けるかということを若いうちから学んでほしいですね」。

また、ICTの活用という意味では、学期の後半、教室での講義ではなく国会および議員会館訪問というフィールドスタディを行ったが、その際Course N@viの「お知らせ機能」が非常に役に立ったという。ゼミとは違い、連絡体制が整っていない科目ということもあり、集合場所の変更や出欠連絡など、Course N@viの「お知らせ機能」を利用しなかったら成り立たなかったそうだ。このように学生との連絡が容易に取れ、急遽の変更にも臨機応変に対応できるというのもICT活用のメリットの一つと言える。

機能から思いつくやり方もある。ICTツールの今後の可能性に期待

アクティブ・ラーニングを取り入れた先行事例などから構成を練って実施したこの授業は、学生授業アンケートでも高い評価を得た。学生たちに自由に書いてもらったレビューでは、「他の講義ではいろんな人と意見交換をする機会がなかったので、この講義はとても新鮮に感じた。意見交換をする中で、同じ意見を持つ人でも物事の見方が自分と異なっていたりして改めて気づかされることが多かった」「考えること、相手に伝えること。この2つを伸ばしてくれたこの授業に感謝している」「2人1組だと、チャット感覚で話し合いができるので、お互いの意見がよく引き出された」などの感想が寄せられた。新美講師は、授業の目標

が学生たちにしっかり伝わり、主体的に学ぶ姿勢を身につけてくれたのではないかと手応えを感じている。

ICTツールの活用について、学生からの要望で新しい使い方を思いつくようなこともあると新美講師はいう。例えば「レポート機能」に関して、当初はWordファイルでレポートを添付するように指示したが、テキストのままでも受け付けて欲しいと要望された。Course N@viではWordもテキストも特に余分な操作をすることなく文章を閲覧することが可能だったので、OKしたという経緯があったそうだ。

「アクティブ・ラーニングを実現するうえでCourse N@viなどのツールはとても有効だと思います。また、『このツールにはこの機能がある。だったらこれができる』と、逆に機能の方から思いつく授業の方法もあるかもしれませんね。今後も積極的に活用していきたいです」。